

7. まとめ

以上、香港中国人から見た日本人の言語外コミュニケーションを考えてみた。スイッチ・オン、参加者、形と媒体の4つのルールに限っても、香港人のコミュニケーション規範から逸脱する現象が多く見られた。同時に、香港人コミュニケーションと比較することで、日本人の言語外コミュニケーションの特徴の幾つかをも明らかにすることができたと思われる。

言語外コミュニケーションの研究は、言語によるコミュニケーションと同じように、コミュニケーションについての理解を深めるのに役立つ。さらに異文化理解にとっても多くの示唆を与える。本稿では経験的な事例を中心にしたが、本来は、体系的なデータ収集と整理が可能であり、今後の発展が期待される。

参考文献

- 橋内武 (1985) 「もしもしから用件に入るまで」『言語生活』 407号 34-42ページ
- Hymes, D. (1972) Models of the interaction of language and social life. In Gumperz, J. and D. Hymes (eds.) *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*. New York: Holt, Rinehart and Winston, pp.35-71.
- Jakobson, R. (1960) Concluding statement: linguistics and poetics. In Sebeok, T.(ed.) *Style in Language*. Cambridge: MIT Press. pp.350-373.
- 南不二男 (1974) 『現代の日本語の構造』 大修館
- ネウストプニー, J. V. (1982) 『日本人とのコミュニケーション』 岩波書店
- Neustupny, J. V. (1987) *Communicating with the Japanese*. The Japan Times
- 時枝誠記 (1954) 『日本文法 文語篇』 岩波書店
- 渡辺武信 (1988) 『住まい方の演出』 中公新書

近接空間

香港人は日本のレストランに入ると、ウェイトレスによって使われる「失礼します」が氾濫していることに気づく。飲み物や料理だけではなく、メニューやレシートをテーブルにおくときにも下げるときにもかならず「失礼します」と言う。また、客がお金を払うのは当然なのに、レジ係はトレイから客の払ったお金を取る時に再度「失礼します」と言う。

「失礼します」について、日本語を教えていたころ、「先生の研究室を訪ねる」というアクティビティーをしたことを思い出す。そのとき、学生には入室と退室の際「失礼します」とあいさつするのだと教えた。どうしても「こんにちは」や「さよなら」を使いたがる学生には「先生の部屋にお邪魔するから」と説得した。確かに日本人とコミュニケーションをするとき、邪魔するという気持ちが必要になることがよくある。

コミュニケーション場面において参加者は一定の物理的な距離を守ったり、コミュニケーションの対象にする空間を調整したりするとされている。人と近接した空間領域の文化的特徴を研究する「近接学」(proxemics)と呼ばれる分野がある。近接学によれば、コミュニケーションにおいては物理的な安心空間としてのプライベート・ゾーンが存在する。レストランの場合、テーブルは客のプライベート・ゾーンとみなされる。大学の場合、先生の研究室全体がプライベート・ゾーンとみなされることになる。従って、相手のウェイトレスや学生がそのゾーンに侵入するときには、「失礼します」というのが当然なのだ。

厳密的な調査ではないが、日本人と香港人の近接空間は異なるようだ。たとえば、知り合いの香港人の友人が空港バスに乗る際、日本人の運転手が荷物を片づけてくれることを知っていたが、バスが遅れたことと、運転手が列になっている乗客の切符をさばいていることを考えて、空いているバスの荷物室に自ら荷物を入れた。対照的に、同じように待っていた日本人客はだれもバスにさわろうとはしなかった。この場合、バスは運転手の近接空間であると日本人客は見なしたものと思われる。香港人はよく親戚や友達の子供を抱っこしたりするが、日本人はあまりしないのも空間距離と関係のあることなのかもしれない。

香港中国人から見た日本人の言語外コミュニケーション

の部分に欠けたり、「お名前は？」など日本人のあまり言わない質問をしたり、視線や身振りが不自然なことが多い。確かに香港人は日本風の自己紹介は得意ではない。決まった自己紹介の形がなく、自ら情報を提供するよりも相手に聞き出されることが多い香港人にとって、日本語で自然に自己紹介ができるようになるには意識的な努力が必要なのだ。

6. 媒体のルール——どんなチャンネルを使うか——

日本人の見分け方

人とコミュニケーションをするため、言語は有効だが、唯一のチャンネルではない。参加者の身振り、手振り、視線、話の調子、服装、使う道具などもまた、コミュニケーションのチャンネルとなる可能性がある。

日本人と香港人は、同じアジア系で服装の流行も似ているため外見からはほとんど差がつかない。ただし、香港人の目からは相手が日本人であることを見分けることは難しいことではない。

たとえば香港のテレビドラマは日本のもの以外に中国大陸や台湾や韓国からのものもある。ほとんどの場合、広東語の吹き込みになっているが、特にファンでない一般の香港人も俳優が日本人であるかどうか識別することができるようだ。

よく香港人に気づかれるのは日本人の頭の動きである。日本人のお辞儀と最敬礼は有名だが、普段会話をしているときも、頭を頻繁に上下に動かすのは香港人にとってはとても日本的なのだ。頭による非言語行動に慣れていない香港人は日本語が上手になっても、あいづちを打ちながら頭を動かしたり、改まった場面で自己紹介をするとき頭をゆっくり下げたりするのはなかなか把握できない人も少なくないだろう。

もう1つはひざまずくことだ。時代劇に限らず、一般のドラマでもよく見られるように、日本人は玄関でお客さんを迎えるときに、しばしひざまずく。ひざまずくというのは相手に最大のお願いをすることになり、香港人だけではなく恐らく12億の中国人にとっては一生しなくてもいい行動だと考えられている。従って、日本の旅館などで日本人にひざまずいて迎えられると、香港人はかなりのショックを受け、うまく反応できない事態が起こる恐れがある。

一日のサイクル： 「おはよう—お休み」

依頼のサイクル： 「よろしくお願ひします—お世話になりました」

訪問のサイクル： 「ようこそ—さようなら」

買い物のサイクル： 「いらっしゃいませ—ご来店ありがとうございました」

アルバイトのサイクル： 「おはようございます—お疲れさまでした」

など、ことばによってある行動サイクルの始まりと終わりを明確に示すのは日本人のコミュニケーションのよくある形と言えよう。日本人と話すときには、始まりがはっきりとしていなければなかなか話が進まないし、終わりがきちんとなししないとどうも気持ちが落ち着かないようだ。挨拶は言うまでもなく広東語にもたくさん存在しているが、香港人にとって行動サイクルについての認識が違うだけではなく、日本語のように場面によって異なる表現で始まりと終わりをマークすることは少ないようだ。

自己紹介

あいさつ以外でも、日本人はさまざまな形で社会文化活動の境界をはっきりさせる傾向が見られる。たとえば日本にも香港にも雨の季節があるが、毎年日本の気象庁は必ずマスコミを通して「梅雨入り」と「梅雨明け」の日を全国に知らせる。一般市民の私にとっては特に梅雨に入っても開けても普通の生活をするだけであるが、日本人にとっては意味があるようだ。また、「初セリ」、「桜の開花宣言」、「春一番」、「感染第一号」、「山開き」、「海開き」など、とくに始まりを言語によってマークすることがよくある。

同じことの延長線で、日本人は人との出会いを新しいコミュニケーション場面として意識し、「自己紹介」という言語行為を通じてオープニングの境界をはっきりさせる。日本語の自己紹介場面は、「はじめまして」や「どうぞよろしくお願ひします」のような決まりきった表現のあることからわかるように、社会言語学で言う「マークされた場面 (marked situation)」であり、日本社会においては思った以上の役割を果たしているように思う。

香港人日本語学習者ならだれでも最初は「はじめまして、山田です、どうぞよろしく」のような例文を勉強するが、ほとんどの人は単に言語知識として覚え、積極的に使用しようとなしな。実際に使ってみても、「どうぞよろしく」

香港中国人から見た日本人の言語外コミュニケーション

を例にして考えると、たとえば「徳華」、「華哥」、「華仔」、「阿華」、「華華」などはあり得るが、目上の親戚や恋人や親友以外にはこのようなファーストネームで呼ぶことはほとんどない。会社や学校などの公的な場面では「陳先生」、「張小姐」、「黄經理」などのタイトルをつけることが多く、またはフルネームでお互いに呼ぶことになっている。ただし、最近の香港では、タイトルで呼びかけるのはまた逆にフォーマルすぎるということになってしまったので、呼びやすいニックネームとして外国人の名前（主に英語）を付ける人が急増している。言うまでもなく英語名は社交上の呼びかけ用なので、本人が納得すれば家族の同意は必要ないし、役所での登録もしない。また時々雑誌で見かけるように「Koyuki」や「Yoshida」など日本風の名前をつけたり、「Happy」や「Genki」など本来名前ではない名前を付けることすらあるのだ。

5. 形のルール——どんな順序でメッセージを組み立てるか——

挨拶のサイクル

日本語を勉強し始めると、日本語の挨拶の種類が多いことに気がつく。たとえば「おはよう—おはよう」、「お休み—お休み」、「いただきます—いただきます」のように相手と同じ表現を使う場合もあれば、「行って来ます—行ってらっしゃい」、「ただいま—お帰り」、「ご馳走さまでした—お粗末さまでした」、「お先に失礼します—お疲れさまでした」のように相手と違う表現を使う場合もある。また「いらっしゃいませ」、「ご来店ありがとうございます」のように相手の答えを求めない場合もある。これらの表現は香港で上映する日本のテレビドラマでは直接に広東語に翻訳され、セリフのまま残ることが多いが、視聴者の香港人にとって意味が分かっているにもかかわらず違和感を感じる。なぜかというところ香港人は同じ場面で挨拶をしない場合が多いからだ。

そもそも日本人はなぜ毎日たくさんの挨拶を使うのだろうか。挨拶の社会的な機能についてはいろいろな分野で分析されてきたが、日本人は特に香港人と比べれば、あいさつの交換を通してさまざまな日常活動のサイクルの境界をはっきりさせようとする意識が強いのではないかと思われる。例を挙げると、

食事のサイクル： 「いただきます—ご馳走さま」

出かけるサイクル： 「行って来ます—ただいま」

的に相手に情報を提供する。一方、香港人はそう簡単に見知らぬ人に自分の名前を教えない。上で述べたように香港には表札やハンコはない。パーティーなどの初対面会話においても、いわゆる「スモール・トーク」を挟みながら、「点称呼阿? (どう呼びますか)」や「貴姓阿? (ご名字は?)」のように相手の名字しか聞かないことが多い。

以上のことを見ると、日本人は自分の名前を世間に公開するという姿勢があるのに対して、香港人にとって名前はプライベートな存在であると言えそうである。従って、長い間日本で生活している香港人は必ずしも気軽に自分の名前を知らない人に教えることができるとは言い切れないし、入国管理局や病院でみんなの前でフルネームで呼ばれる際に、多かれ少なかれプライバシーの侵害を感じる人もいるかもしれない。

「真紀子さん」と「宗男議員」

最近の新聞には「真紀子さん」と「宗男議員」のニュースが多い。政治経済欄という改まったジャンルであるにもかかわらず、なぜ記者がファーストネームで報道するのは香港人にとって興味深い。「田中」と「鈴木」という同姓の議員が多いから、名字よりも名前の方が区別しやすいとも考えられるが、同じ国会議員の「加藤氏」や「森元首相」のファーストネームはあまり知られていない。同姓同名の問題がもっと深刻な香港においても、「毛澤東」を「澤東主席」とするような報道はあり得ない。

確かに日本人はよくファーストネームを使う。たとえば、日本人のこどもは自分のことを「わたし」ではなく「ショウタも」のように話したり、相手のことを「あなた」ではなく「アヤカちゃんは?」のように聞いたりする。家庭内あるいは親戚の間では、こどもが大人になると「くん」や「ちゃん」から「さん」をつけるようになるが、やはりファーストネームで呼ぶことが多い。私的関係以外でも、たとえば会社やマスコミのような公的な場合でもよく「聖子さん」や「金八先生」や「雅子さま」のように人の名前を耳にする。日本人のファーストネームはどうも愛称として使われている部分が多いのではないかという印象がある。

一方、香港人によるファーストネームの選択は、愛称以上に親密な関係をもたらす結果となるため、使える場面がとても限られている。人気歌手の劉徳華

香港中国人から見た日本人の言語外コミュニケーション

し手の発話権（フロア）を奪ってしまう恐れがあるので、日本人にとっては反対に非協力的に見られてしまうかもしれない。

4. 参加者のルール——だれとコミュニケーションをするか——

名前という看板

コミュニケーションの参加者には、話し手（あるいは発信者）、聞き手（あるいは受信者）、そして第三者がおり、そのためにお互いのことや、その場にはいない第三者についてなんらかの方法で言及する必要が出てくる。

日本人の名前は構造的に香港人の名前と同じように「姓+名」となっており、漢字を使う場合が多いので、字数と漢字の選択が若干違う以外にそれほど差がないのではないかという印象を受けるが、実際のコミュニケーションにおいて、名前の用い方には大きな違いが見られる。

まず、日本の家では入り口に掛かっている名字の書かれた立派な表札が目につく。マンションの場合、玄関ホールの郵便受けに部屋番号だけではなく、それぞれの部屋に住んでいる人の名前もついている。香港では治安が悪いということと関係しているかもしれないが、近所同士でもお互いに名前を知らないことが多い。また、日本人はよく名前シールや刺繍などで自分の所有物に名前を大きく表示することがある。香港人から見ると、子供なら忘れ物を防ぐために名前をつけるのは理解できるが、大人なのになぜ服や道具などの表に名前をつけなければならないのかは不思議に思う。さらに、日本には「ハンコ」という名字しかないカジュアルな印鑑があり、頻繁に使われる。ハンコは会社だけではなく、一般家庭の玄関にも常時おいてあり、宅急便や郵便が来たら受け取りの承認として本人以外の人でも自由に使うことができるようである。香港人も大きな印鑑を所持しているが、ハンコはない。印鑑には姓名両方が刻まれており、そういつもいつも使うものではない。

後でも触れるが、日本人はいろいろな場面で自己紹介をする。たとえば、訪問販売に来たセールスマンは会社の名前だけではなく自分の名前も紹介する。同じように電話での問い合わせでも相手がよく名前を教えてくれる。また最近では変わってきたかもしれないが、日本人は電話に出ると名乗る人が多い（橋内1985）。個人レベルの初対面会話では日本人は名前以外に所属や出身など積極

することになるから、玄関の土間はまだ「内」ではない（渡辺1988）。しかし、マンションの長い廊下を考えると、「どうぞお上がりください」と言われても、そこから私的領域でのコミュニケーションをスイッチ・オンできるわけでは必ずしもないようだ。

「いい子」のコミュニケーション場面

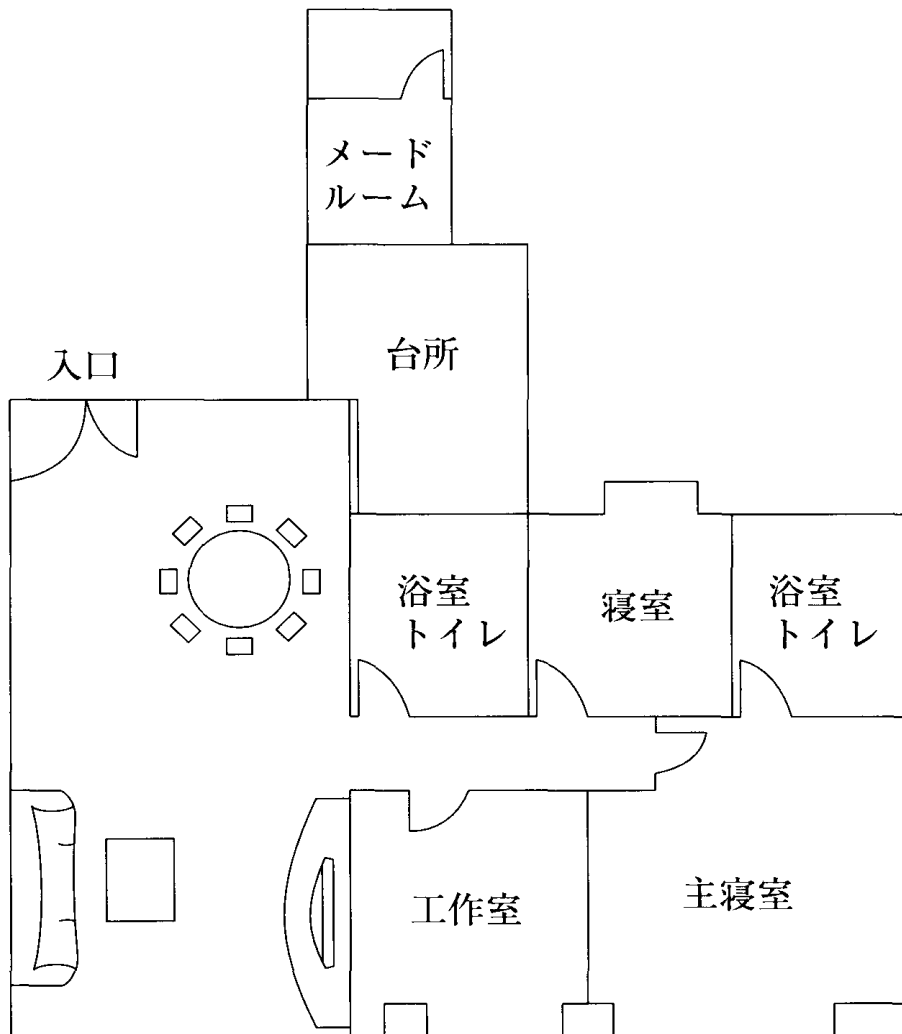
香港の一般家庭では人に会ったら大きい声であいさつする、人が話している間は邪魔しないというしつけがある。

日本ではこのルールはいつも適用できるとは言えない。たとえば、最初こどもを保育園に預けようと登園した際、ほかのお母さんに会ってにこにこして大きな声で「おはようございます」とあいさつを試みたが、保育園の先生と間違えられてしまった。また、会合などで第三者からの紹介を通さずに積極的にあいさつをしたり自己紹介をしたりするのはあまり好ましくないようだ。

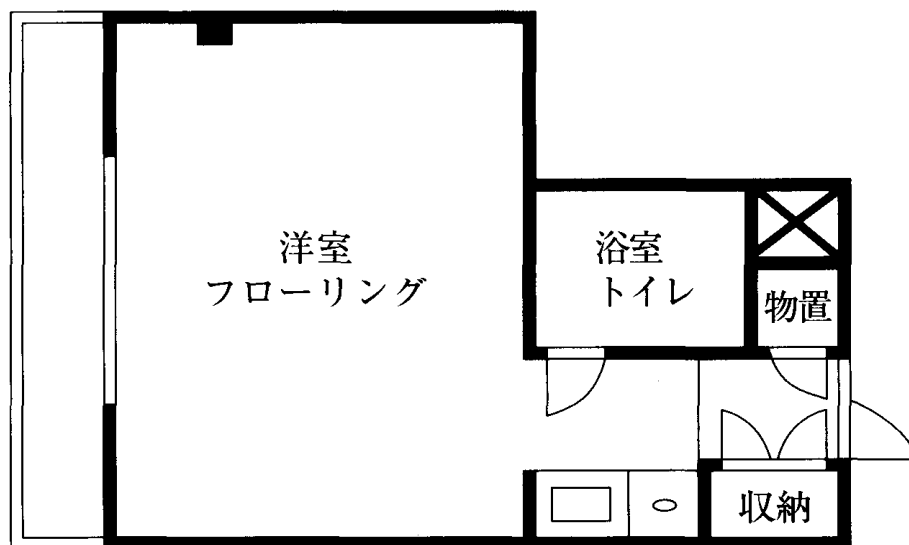
これと逆に人と対面していなくても何か話さなくてはいけないこともある。上で述べた玄関の場合、家に誰がいるかまだ分からなくても「ただいま」とあいさつしないと怒っていると誤解されるし、美容院などで担当以外の美容師全員から自分の行動について「お疲れさまでした」や「ありがとうございました」などであいさつされることは珍しくない。

「いい子」は適切にコミュニケーション場面を認識し、スイッチ・オンするだけではなく、会話を維持して、協力の姿勢を見せることも求められる。昔ホームステイをしていた頃、日本人ホストマザーの「おばさま」の話に対してどう反応すればいいのかがまったくわからなかった。日本語がすぐに理解できないため、最後までじっくり聞かないと反応できない場合が多かったのだが、内容が分かっているにもかかわらず最後まで聞いて最敬礼するつもりで「はい」と答えたい気持ちが強かった。やがて日本語がだんだん話せるようになってから、おばさまの話に沿って質問をしたり、確認したり、関連する話題を出すことで、協力しようと考えた。

しかし、最近の社会言語学の研究でも明らかなように、これらの努力は徒勞だったようだ。日本語会話での聞き手はあいづちなどを通して相手の話を促す積極的な役割を持たされている。私の「はい」のタイミングや調子に問題があることは明らかである。また、話題を提供したり、発展させたりするのは話



香港マンションの間取り図



日本ワンルームマンションの間取り図

ンションや学生アパートはいくら狭くても必ず玄関がついている。日本人はいったい玄関で何をするのかは気になるところである。

日本で生活したことのある香港人ならすぐに玄関での日本語として「行って来ます」、「行ってらっしゃい」、「狭いですけどどうぞお上がりください」、「宅急便です、印鑑をお願いします」などを覚える。一方、日本語のできない一般香港市民も広東語吹き込みの日本のテレビドラマなどを通して、日本人は玄関で長い立ち話をしたり、セールスマンなどの知らない人を招き入れたりすることに気がつく。玄関の代わりに入り口に頑丈な格子のついている環境に慣れた香港人にとっては日本の玄関は珍しい空間というだけではなく、そこでスイッチ・オンされるコミュニケーション場面が大切な学習対象になる。外国人としての香港人は日本住宅の玄関スペースに入る前に自己紹介をし始めたり、玄関でおみやげを渡したりしないように常に意識しなければならない。

あいまいな廊下

玄関と違って、廊下は日本人のコミュニケーションの場ではないようだ。よくテレビドラマにも出てくるように、日本人同士は玄関でいろいろなあいさつを交わすが、上がり框を越え廊下を通過する間は、話を続けるのではなく、コミュニケーションは一休みするという沈黙のシーンが目につく。交換留学生時代はこのような沈黙についてとても不自然に感じ、日本語ができないのにも関わらず、「お家はすてきですね」などと話題を切り出したりして、沈黙からの脱出を図った。しかしほとんどの場合、相手は予想外に冷たかった。

このような気まずさの要因の1つは、日本の家の廊下が長すぎることにあるかもしれない。特にマンションの場合、日本人は「全戸南向き」の設計にこだわるせいか、居間と玄関は南と北に対照的に配置され、客であっても寝室や風呂場などに挟まれた長い廊下を通らなければならない。そのため、余計に沈黙の長さが気になるのだ。

しかし、日本人にもまた廊下でのコミュニケーションについての意識が定まっていないという問題があるかもしれない。昔の日本家屋では畳の部屋を障子で仕切っていて、廊下という構造はなかった。「廊下」はむしろ近代化の産物として生まれ、玄関と違ってコミュニケーションの歴史が浅いのである。

もちろん、日本人にとっては履き物を脱ぐという行為を通じて外と内を区別

香港中国人から見た日本人の言語外コミュニケーション

だれとコミュニケーションをするか。例：年賀状はだれに出すべきか、誰に出さなくてもいいか。

4 言語バラエティーのルール

どんな言語または言語スタイルで伝えるか。例：年賀状は敬語で書くか、普通体で書くか。

5 内容のルール

何を伝えるか。例：年賀状にどんなことについて書くべきか。

6 形のルール

どんな形（順序）でメッセージを組み立てるか。例：年賀状のフォーマットはどうするか。

7 媒体のルール

どんなチャンネル（音声、文章、身振り）を使うか。例：新年のあいさつは年賀状にするか、電話で伝えるか。

8 操作のルール

自分や相手のコミュニケーション行為に対してどう評価するか、またはどう訂正するか。例：年賀状を出しそびれた場合どうするか。

次節以降、香港中国人から見た日本人の言語外コミュニケーションについて、スイッチ・オン、参加者、形、媒体の4つのルールについて考えることにしたい。

3. スイッチ・オンのルール

——どんな場合にコミュニケーションを始めるか——

玄関の役割

言うまでもなく、人とのやりとりはどんな場面でもスイッチ・オンされるわけでない。コミュニケーション場面かどうかについての認識は社会文化的な要因で決定されることが多いのだが、物理的な生活様式からの影響も大きいようだ。たとえば、香港には玄関スペース（土間・三和土）がないため、香港人は日本人の玄関でのコミュニケーションについて不思議に思う。27ページの間取り図のように香港では100平方メートル以上のいわゆる豪邸マンションにおいても玄関スペースのない場合がほとんどなのに対して、東京のワンルームマ

て簡単なことではない。

問題はさらに問題を生む

最後に、年賀状は一方的なコミュニケーションではないため、期待していた人から来ていない場合、期待していなかったのに届いた場合、自分自身出しそびれたことを発見した場合、どのように評価し、どのように対処すべきなのだろうか。あるいは、そういう人に対して来年はどのようにすべきなのだろうか。問題はさらに問題を生むのである。

以上述べてきたように、必要な日本語がほとんど印刷されているにも関わらず、日本人と年賀状交換するというコミュニケーション行動を遂行するためには、日本語の文法以外の多くの言語外コミュニケーション・ルールが求められていることが分かる。言語外コミュニケーション・ルールは社会によって異なるが、コミュニケーションを成り立たせるコミュニケーションの要素自体は普遍的である。コミュニケーション要素についての研究には、いままで日本国内では時枝（1954）や南（1974）、海外ではJakobson（1960）やHymes（1972）などがあるが、ここではネウストプニー（1982、1987）のモデルを紹介することにする。

2. 言語外コミュニケーションの要素

ネウストプニー（1982、1987）によると言語外コミュニケーション行動は次の8つの枠内で整理することができる。先の年賀状の例を示したので、だいたいの見当はつくだろう。

1 スイッチ・オンのルール

どんな場合にコミュニケーションを始めるか。例：年賀状を出すか出さないか。

2 セッティングのルール

いつ、どこでコミュニケーションを行うか。例：いつどこで年賀状を出すか。

3 参加者のルール

香港中国人から見た日本人の言語外コミュニケーション

何を書けばよいか

年賀状に使える日本語が厳しく制限されている以上、どんな内容も書けるわけではないことも明らかだろう。以前、中国人留学生の大学院生から小さい字でびっしりと一年間お世話になったことから今後の研究計画まで書かれた年賀状が届いたことがあったが、その種の年賀状を日本人からもらったことは一度もない。また、新年の挨拶として、香港では「恭喜發財」や「萬事勝意」など相手のご多幸を祈るといふ共通意識があるが、日本の場合はどうしても日ごろお世話になったことへのお礼と今後のお願いが中心になっている。年賀状を仕上げる際、日付を書いた日ではなく次の年の一月にしたりしなければならぬのも不安につながる。

フォーマットよ!

伝える内容が決まったら形を整えなければならない。香港と日本は同じアジア地域の漢字文化圏であるにも関わらず、はがきのフォーマットはまったく違う。まず、項目の配置が違う。たとえば、香港では日付をはがきの右下に書く意識があるが、右上に書かなければならない。行のバランスも異なる。中国語の手紙なら一般的に第1行はほかの行より2文字低くするが、日本の年賀状の場合には第1行を一番高くするようだ。

年賀状のフォーマットに関してもっとも違和感を感じるのは字の大きさである。昔、ある日本の大学から来た手紙に自分の名前が封筒の4分の1を占めるほど大きく書かれていて驚いた記憶がある。年賀状のテキストと宛名などの各項目のバランスをどう取るのかは私にとって永遠のテーマである。

年賀状というチャンネル

年賀状は言うまでもなくお正月のあいさつを相手に伝える唯一のチャンネルではない。たとえば、香港では年賀状を送るよりも年始回りをしたり、電話で祝賀の言葉を贈ったりすることが一般的である。日本では、年賀状を出さずにお正月に親戚を訪問することは恐らくないし、年末年始は実家に帰ることになっていてもわざわざ年賀状を出しておく人が多いだろう。年賀状というチャンネルを選択して、印刷か手書きか、筆かボールペンか、草書か楷書か、ハンコか写真かを毎年の楽しみにする日本人もいるようだが、外国人にとっては決し

誰に出せばよいか

年賀状を出すことを決めたとしても、誰に出すかという悩みが出てくる。日本人に言わせるとお世話になった人に出すことになるが、そう簡単ではない。まず両親や兄弟や親友など、広東語で言ういわゆる「自己人」のグループにはお世話になったこと自体を口に出さないようにする意識が働く。そのため、私のように国際結婚をしている場合に当然出さなければならない日本人の親戚に年賀状を書くのがそもそも抵抗がある。家族や友人以外になると、これまた難しくなる。どこからどこまでの範囲の人に出せばよいのだろう。そこには何か一般的な基準があるだろうか。さらに不幸のあった知人から「年末年始のごあいさつをご遠慮申し上げます」というお知らせが来ることもある。せっかく新春に縁起のいいことばを贈りたいのに、年賀状を控えなければならない。

タイミングの悩み

年賀状を出すタイミングも思った以上に複雑に思う。英語圏の season's greetings と同じように、日本の年賀状にもシーズンがあることは知っているが、ルールの多さに戸惑う。たとえば年末に写真屋の年賀状印刷期間も限定されているし、郵便局の年賀状受付期間も決まっている。もっとも驚いたのは年末に投函された年賀状はすべて1月1日の配達になるということだ。元旦の日に輪ゴムで綴じた一束の年賀状を読む楽しみが分からなかったころ、年賀状を1月1日に届くように投函しなければならないと考えるのは大きなプレッシャーだった。

年賀状の日本語

年賀状は手紙と同様に改まった場面でのコミュニケーションなので、書くにあたり日本語を磨きたい意識が強い。しかしどのような日本語で書くべきかについて迷うこともよくあった。迷うのは選択が多いからではなく、選択が少なすぎるからだ。「年賀状スタイル」と言えるほど、使える日本語はかなり固定されており、「謹んで」を「祝」に変えたり、「お世話になり」を「お世話になって」に変えたり、表現を自由に磨いたり、個性を発揮したりすることは許されないのだ。

香港中国人から見た日本人の言語外コミュニケーション

S. K. ファン

1. 外国人が年賀状を出すまでの悩み

まずは私の個人的な経験から筆を起こしていきたい。日本語を学び始めたときから日本人の間で年賀状を交換する社会文化的な習慣は知っていた。20年ほど前のことになるが、交換留学生として初めて日本で正月を迎えることとなった年の暮れに、近所の写真屋の宣伝に惹かれ、年賀状を出すことにした。初級日本語学習者ながら、わざわざ図書館から借りてきた挨拶状の書き方の本を参考に日本人の知り合いに年賀状を書いてみた。しかし、書けば書くほど不安が増し、結局、年賀状文化のない香港の家族にしか出すことができなかった。それ以来、日本語がますます使えるようになった今になっても、年賀状を通じての日本人とのコミュニケーションに自信がもてない。理由は明らかに日本語そのものではない。

年賀状を出すのか出さないのか

たとえば、毎年年賀状を出すか出さないかという問題に直面する。日本で生活している現在は、年賀状の交換を年末年始のコミュニケーション場面として認識するため、年賀状を出す気持ちが強い。しかし、オーストラリアの大学の日本研究科に所属していたころ、日本人の関係者に年賀状を出すべきかクリスマス・カードを出すべきかをいつも迷っていた。香港で暮らす場合には、日本の年賀状そのものは簡単に買えるのだが、旧正月の意識がとても強いので、12月の年賀状書きの時期は「新年はまだまだ先」という気がしてしまう。お祝いの言葉を交わす年賀状を出す気持ちを作るのは一苦勞なのである。